県立特別支援学校の教育環境改善を目指して
― 東葛飾地域に「県立東葛の森特別支援学校」新設 ―

県教育庁教育振興部特別支援教育課

1　はじめに

県立特別支援学校においては、近年、知的障害特別支援学校を中心に児童生徒数が急激に増加し、教室不足等の過密状況が続いている。県教育委員会では、平成29年10月に「第２次県立特別支援学校整備計画」（以下、第２次整備計画）を策定し、過密状況解消に努めてきた。

本稿では、第２次整備計画の概要及び整備手法について述べた上で、令和４年４月に開校予定の「県立東葛の森特別支援学校」について紹介していく。

2　第２次整備計画について

県立特別支援学校の児童生徒は、令和２年度で5,765人となり、「特別支援教育」が位置付けられた平成19年度から1,692人、約1.4倍増加している。県教育委員会では、児童生徒数増に伴う過密状況解消のため、平成23年３月に策定された「県立特別支援学校整備計画」に引き続き、平成29年度から令和３年度までの５年間を計画期間とする第２次整備計画を策定した。

具体的には、以下の三つの手法で過密状況に対応している。

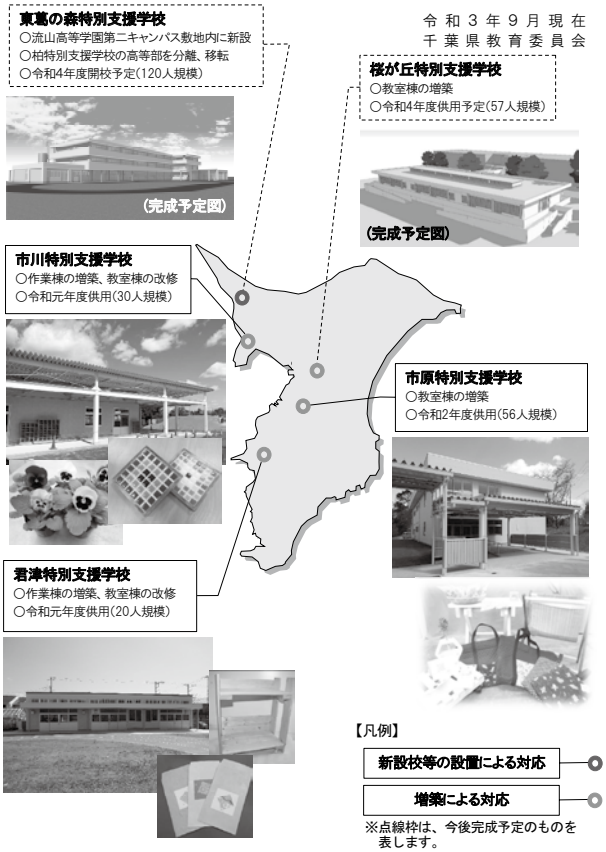
- 県立学校及び市町村立学校の転用可能な校地、校舎等の活用（学校の新設）
- 教室棟、作業棟の校舎増築
- 通学区域の調整

3　県立東葛の森特別支援学校について

第２次整備計画における初めての新設校として、県立東葛の森特別支援学校が、令和４年４月に開校する。この学校は、県立柏特別支援学校の高等部を分離して設置するもので、高等部普通科の単独校になる。高等部分離により、これまで高等部が使用していた教室等を小学部、中学部が使用することができるため、県立柏特別支援学校の過密状況の緩和が見込まれる。

学校の位置は流山市の南部で、県立特別支援学校流山高等学園第二キャンパス（以下、流山第二キャンパス）の敷地内に設置する。流山第二キャンパスの生徒と合同使用となる

「第2次県立特別支援学校整備計画」に基づく整備状況



第２次整備計画に基づく整備状況
（千葉県教育委員会ホームページより）

運動場は、走路以外の場所を芝生張りとし、安全に活動できるようになっている。流山第二キャンパスの体育館脇には、エレベーター棟を設置し、車いすを使用している生徒も移動でき、体育館を合同使用することが可能となっている。通学区域はこれまでの県立柏特別支援学校と同様であるため、自力通学が難しい生徒の通学を保障するため、スクールバス３台を通学区域内で運行する。対象の障害種は知的障害である。

現在の県立東葛の森特別支援学校建物工事の様子
（令和３年７月現在）

校舎全景（南東側から）

生徒昇降口

令和４年度の開校に向けて、令和３年４月から流山第二キャンパス内に県立東葛の森特別支援学校開設準備室を設置し、準備に係る業務を中心となって進めている。教育課程の策定や入学者選考に関すること、総務・渉外に関することなど開設準備室の業務は多岐にわたる。

また、建物工事は令和２年８月から開始しており、令和３年10月の竣工を予定している。

4　学校の名称について

校名については令和２年９月下旬から11月初旬までの期間で県立柏特別支援学校や県教育委員会のホームページ等で公募した。125件の校名案の応募があり、児童生徒や保護者、地域の方々に分かりやすく親しみやすいこと、設置する学校の所在地が分かること等を考慮しながら、開設準備委員会と県教育委員会とが候補案の選定を行った。

検討の結果、「東葛の森（とうかつのもり）特別支援学校」が校名案となった。東葛飾地域の通称である「東葛（とうかつ）」は、県民の皆様になじみがあり、障害のある生徒にとっても言いやすいこと、また、「森」という言葉からは、人が集まる憩いの場、豊かな自然が感じられ、木々のように生徒が自立に向けて成長することへの期待が込められた名称であり、特別支援学校のイメージにも合っていることが校名案となった理由である。校名案は、令和３年６月の定例県議会において議決され、正式に校名が決定した。

5　おわりに

県立特別支援学校で校舎を新築しての新設校は、県立特別支援学校流山高等学園以来25年ぶりで、令和初の県立特別支援学校の設置となる。これから県立東葛の森特別支援学校で学ぶ一人一人の生徒が自立に向けて、自分を高め、同じ学校に通う仲間とともに充実した学校生活を送る姿を期待している。

当課においても、引き続き県立特別支援学校の過密状況の解消等、児童生徒の障害の実態に応じた、より良い教育環境の整備に努めていく。

県立現代産業科学館　令和３年度企画展「カ・ラ・ク・る―歯車が伝える動き―」

会期：10月16日（土）～12月５日（日）

県立現代産業科学館

県立現代産業科学館は、産業に応用された科学技術を、体験的に楽しみながら学ぶことを目的とした博物館である。今年度の企画展では、「歯車などが伝える動き」をテーマに、身近な機械の「動くしくみ」について考える。

「からくる」とは糸などを操（く）る、転じて首尾よく命令をすることである。

からくり人形と聞いて思い浮かべるのは、高山祭りなどの山車（だし）からくりや正時に時を告げるからくり時計の人形、はたまた江戸時代の茶運び人形など、枚挙にいとまがない。いずれも機構（きこう）が仕掛けられて、人形の動きがあらかじめプログラムされているものである。

からくり人形制作のための唯一最良のマニュアル本『機巧図彙（からくりずい）』は、江戸中期（1796年）に土佐藩の細川頼直（ほそかわよりなお）（生年不詳～1796年）が著した技術書である。当時作られていたからくり人形のパーツや材料、組立方法を含めたいわば設計書だが、掲載されている人形の実物は、長い間発見されていなかった。

昭和40年代、この技術書のとおりにからくり人形の復元をする活動が、大学の研究者・学生の間で始まった。やがて一般の中からも興味をもち制作する人が現れた。その後、茶運び人形のキットが販売され、さらに江戸からくり人形の研究会も発足した。

茶運び人形は、手に持ったお盆に主人が茶碗を載せると客の方向に動き出し、客の前へと進む仕掛けである。客が茶碗を取ると止まり、再び茶碗を載せると180度回転し、元の位置に戻る。西洋からもたらされた時計に使われていた平歯車やゼンマイ、カム、動く速さを調整する脱進機（調速機）などの作用で、その一連の動きが実現される。時計からヒントを得て、遊び心ある江戸時代の日本人が生み出した、優雅な振舞の茶運び人形は、まるで人形に命が吹き込まれているかのようである。

茶運び人形
榎本誠治氏制作（2021年）

江戸時代の戯曲者井原西鶴は1675年刊『独吟百韻（どくぎんひゃくいん）』に「茶を運ぶ人形の車はたらきて」の句を掲げ、自註で茶運び人形に遭遇した際の驚きを語っている。

写真の茶運び人形は、現代の江戸からくり人形師が『機巧図彙』を解読・研究して制作したものである。自身の研究成果を反映させ、機構の形の探求や材料の選定に邁進し、精巧な加工技術を用いた作品だ。着物で覆われた見えない部分には力を伝えるからくりの機構があり、よりスムーズな動きを導く工夫がちりばめられた逸品である。

この展覧会では、先人たちの創意工夫から今に繋がる、機械の裏側で動きを伝える数々の歯車機構などを、動画とともに紹介する。

■入場料：一般500円、高校・大学生250円
■県立現代産業科学館
市川市鬼高１－１－３
電話：047－379－2000
URL：http://www2.chiba-muse.or.jp/SCIENCE/

県立中央博物館大多喜城分館　令和３年度企画展「兜とカブト」

会期：10月22日（金）～12月５日（日）

県立中央博物館大多喜城分館

県立中央博物館大多喜城分館では、令和３年10月22日（金）から12月５日（日）の会期で、企画展「兜とカブト」を開催する。

日本列島にヒトが住みはじめ、集団で闘争を行うようになると、ヒトは護身として甲冑を身に付けた。甲冑のうち、頭を保護する防具が「冑（かぶと）」であり、「兜（かぶと）」という漢字を当てる場合が多い。

武器や戦法が時代とともに変化し、それに対応するための防衛力の強化が必要となった。さらに生産技術の向上が、甲冑の発達に拍車をかけた。甲冑が発達する変革期の一つとして戦国時代を挙げることができる。

戦乱が続くなか、論功行賞を優位に進めるため、集団の中で己を主張することが必要になった武将たちは、その主張を頭部へ向けることになるのである。前立（まえだて）や脇立（わきだて）、後立（うしろだて）と呼ばれる立物によって兜を飾ったほか、漆で固めた和紙や薄い板などで兜自体をユニークな形に変形させた。これらを「変わり兜」と呼んでいる。変わり兜のモチーフとなったのは、動物、植物、被り物などで、山岳や自然現象も題材となっている。

例えば動物では兎をかたどったものが多い。ひ弱なイメージがあるが、敏捷で、耳の長さが目立つ兎は、人気が高かった。

写真の兜は、兎の頭から尻尾までをかたどり、長く立つ耳は内面に金箔を押し、裏面には毛を植えている。また、眉毛と髭にも毛が植えられ、兎を写実的に表現したものとなっている。

兎形兜（うさぎなりかぶと）（大多喜城分館蔵）

今回の展示では、このようないろいろなモチーフの変わり兜の数々を紹介する。

現代において、私たちが兜を身に付けることはほとんどないが、身の周りを見渡してみると、カブトを身にまとう生き物が多く生息していることに気が付く。展示では、変わり兜に加え、カブトムシやカブトガニなど、身近に生息するカブトにちなんだ生き物についても紹介する。

■入場料：一般300円、高校・大学生150円

■県立中央博物館大多喜城分館
夷隅郡大多喜町大多喜481
電話：0470－82－3007
URL：http://www.chiba-muse.or.jp/

SONAN/